

乳幼児の描画表現 再検証 その1

——Scribble に関わる一考察——

Reexamination of Drawings by Infants, Part I
: Concerning “Scribbling”

平 田 智 久

Tomohisa Hirata

(幼児教育学科)

はじめに

乳幼児にとって描画行動は他のさまざまな活動と同様に、大好きな活動のひとつである。その行動を観察していると、自らの感性を働かせて、獲得し得た自らの能力を駆使している行動である。そうした表現行動を通してより豊かな感性や創造性を培い、充実した育ちを保障していくことが現代幼児教育の根幹となっていることは言うまでもない。

教え込みの強い指導ではなく、乳幼児の行動を真摯に受け止めながら適切な環境を整え刺激し応答する保育こそが重要であると考えて乳幼児に接してきた。そうした保育の中で一枚の絵に出会ったことが本研究のきっかけとなった。

それは1歳7ヶ月の女兒が新聞紙の上に描いた絵(図1)である。部屋に散らかっていた新聞紙を片付けようとした時、油性のフェルトペンで描かれた絵を発見した。はじめは何気なくまとめていたのだが、その痕跡が紙面のある特定の部分にこだわりながら描かれていることに気がつき驚いた。

さらに、描いた子どもが1歳7ヶ月の“むつみちゃん”とすぐに特定できたので、なおさら考えさせられてしまった。

その驚きとは、フェルトペンの痕跡を発見した時は『なぐり描き』と軽く考えてしまったからに他ならない。

乳幼児の描画発達の諸説に、このような意図的な『なぐり描き』があったのだろうかということに強い興味を抱いた。

研究の目的と方法

いわゆる『なぐり描き』に関わる諸説について調査し検証することは、乳幼児の表現行動を的確に受け止め応える保育の実現に必要かつ重要なことと考えた。

幼児教育学科

The Course of Early Childhood Education

キーワード: Scribble, 内的探求, イメージ

そこで、(1)文献による調査(2)乳児を中心とした Scribble 作品の収集と分析を行うことにした。

経過及び考察

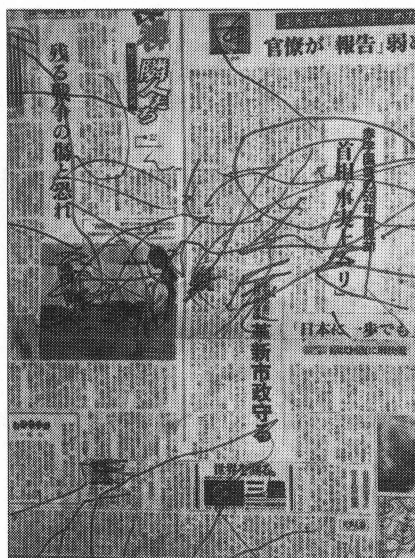
いわゆる『なぐり描き』といわれているが、他にも『錯画』『ぬたくり』『乱画』『掻画』などとも呼ばれている。しかし、そのほとんどの呼称は乳幼児の描いている姿とは程遠い感がある。殴りつけるように…とか塗りたくっている…などとは思えない。まして、乱れている、あやま(錯)っているのではない。とすれば、乳幼児の実際の姿が感じ取れる日本語の呼称を考える必要があるだろう。

外国の文献の中で現在最も多く使用されていると思われる呼称は Scribble (スクリブル) ではないだろうか。

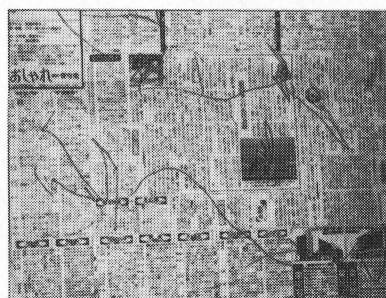
Scribble は、ローダ・ケログ夫人 (Rhoda Kellogg) の研究が詳しい。

ケログの著書 *Analyzing Children's Art* (児童画の発達過程・深田尚彦訳 黎明書房刊 昭和46年⁽¹⁾) の冒頭に「長い間、幼児たちがスクリブルすることから得る基本的な喜びは動作によるもの、あるいは“運動快感”と考えられてきた。それは視覚的快感が基本だと言い直してもよいのである。…」と適切に述べている。

図1、むつみちゃんの痕跡はたどたどしいながらも懸命にコントロールしようとした線である。紙面の写真などに刺激を受けて反応し、自らの手でフェルトペンを駆使しようとして努力し、自分が興味を示した部分に出来た痕跡を確認し喜び、さらに興味を持続させる。まさにそれはケログの言う視覚的快感に他ならない。そうした一連の行為はむつみちゃんの意識的な行動として読み取ることが出来る。



むつみ①



むつみ②

図1 むつみ 1歳7ヶ月

この事例は特殊な一例なのか否かについて検証する必要がある。そこで、千葉県我孫子市にあるJ保育園に協力依頼し、“1歳から2歳児は新聞紙にどのようなスクリブルをするのか”について調査した。

その結果は18名中15名が新聞紙上の視覚的な刺激を受けてスクリブルをしていた。むつみちゃんの事例が特別なことではないことが明らかになった。調査結果の例が図2, 図3である。

さらに、それら視覚的な刺激になっていた紙面の特徴は写真への関心が高いことがわかった。

本調査では同一の新聞紙面で調査していない。一定の条件を整えて行わなかったため数値化しなかった。

しかし、新たな研究課題に会った。それは次のとおりである。

スクリブルであっても意識的な行動として読み取れることがわかったが、さらに写真に写っている人間の部分に特に強く反応していることにも驚いた。図3のひろと君は顔写真の部分に懸命にマークしている。さらにそのマークの仕方を観察してみると明らかに眼の部分に焦点が

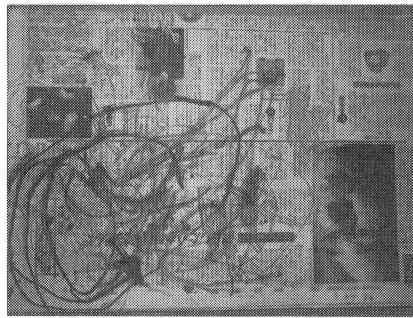
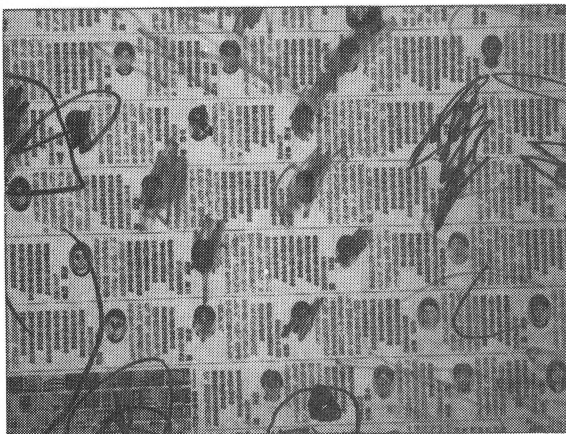
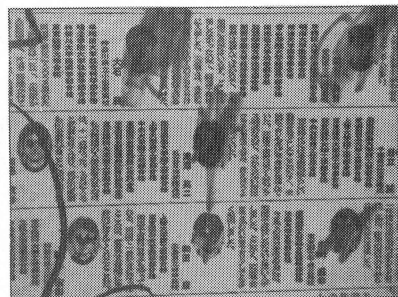


図2 ゆうや 2歳4ヶ月



ひろと①



ひろと②

図3 ひろと 1歳11ヶ月

当てられ強調している。

これらの行動は人の気配を感じての反応なのか否かについては本研究から微妙に外れる。しかしながら幼児の描画行動は経験を重ねたり興味関心の深まりから、徐々に変化していく。そして円が描け、『頭足人』と呼ばれる人物表現がみられるようになる。大きな円形の内側には小さな円で目と口を描き入れ、外側には手足と思われる線が直接描かれた絵である。

そうした頭足表現の源は、人物の気配に反応したり眼に強い関心を抱いてスクリブルしたひろと君のような行為と関係があるように思える。今後の研究としたい。

文献の調査より

スクリブルに関する文献を調査した経過について、ケログの説については前述のとおりである。そのほかの説について述べてみる。

多田信作は著書〔絵の教育（黎明書房刊・昭和46年）⁽²⁾〕の中で「1～2歳の子どもがクレヨンをもって紙の上をトントンとたたいて、あとをつけたり、なぐりがきをしたりすることがある。これは確かに、紙の上にかいているといえるが、いわゆる表現活動ではない。手の運動を土台とした表出活動である。これは単に手を動かしているだけである。」

霜田静志は「錯画は知的な面、意識的な面から見れば、何ら意味のないものとみられよう。しかしこれを無意識的な面から見れば大いに意味がある。知的な意味はないかもしれぬが、感情的には多くの意味がある。たとえば、同じくわけのわからぬ乱線を描くとしても、気の弱い子どもは、臆病な弱い線をたどたどしく引くであろうし、気の強い大胆な子は力強い線で、勢い良く描くであろう。内心に葛藤をもつ子どもは、錯雑した混乱の画面をつくり上げるであろうし、調和的な安定した心をもつ子どもは、無意味な乱線をぬたくっているようでも、そこにおのずから調和があり、全体がリズムカルに整ったものになる。」〔児童画の心理と教育（金子書房刊・昭和35年）⁽³⁾〕とある。

多田氏、霜田氏ともにスクリブルは無意味なこととしているが、現実の子どもの姿と合致しない。しかし霜田氏の心理的な見解については学ばなくてはならない。

アメリカの W. ランバート・ブリテンも〔Creativity, Art, and the Young Child 幼児の造形と創造性・黒川建一監訳 黎明書房刊 昭和58年⁽⁴⁾〕の著書の中で「1歳から2歳・2歳6ヶ月の無統制錯画（random scribble）は、描かれる線を追って楽しんでいるようであって、描線を統制しようとしているのではない」と、言っている。

鬼丸吉弘が翻訳したドイツのヴォルフガング・グレッツィンゲルの著書〔なぐり描きの発達過程⁽⁵⁾〕では、「なぐり描きは子どもたちが自分自身に書いた手紙であり、子どもが＜自分に＞立ち帰るための自己対話です。それと共に、子どもがはじめて鉛筆を手にする時、彼がすでに立っている言語の段階をはるかに遡る発端が、そこに置かれているのです。なぐり描きは乳児の声音です。対象もなく言葉をもなしません、生のリズムそのものです」と。そして、画を描く子どもをもつ両親のための十戒と題し「すぐ、これなあにと聞いては行けない」とか「待つことを学べ」など子ども主体にしたメッセージへと続いている。

さらに、林健造は錯画に関し「人間の手指関節や筋肉の自然性（または必然性）が大きく影響しているものであって、従来までの内的探求に加えるに、この種の外的研究がなされ、これ

らの結合においてはじめて錯画の問題が解決されるものであらうと考える。」と指摘している。
〔幼児造形教育論・林健造著、建帛社刊 昭和62年⁽⁶⁾〕

点や直線的な描線から徐々に曲線的な描線、円へとスクリブルが変容していく自然性を重視した外的研究の意味は重要であり、グレッツィングの立場と共通しているところが多い。

さらにスクリブルがどのような生活の中で発生するのか、心情との関わりや言葉と結びつく背景など内的探求が重要となる。

スクリブルの内的探求

霜田静志はスクリブルに知的意識の意味を認めていないが、感情的な表れについてはスクリブルに内在する重要性を認めている。

J保育園での調査に際しても、心の変容に関する重要な発見があった。偶然にも生まれ月が同じ男女で2歳4ヶ月児のスクリブル作品に出会えた。

しかも男児ののりひと君は1月12日に、女児のあやかちゃんは1月19日にそれぞれその日に連続して描いた作品である。(図4・図5参照)

作品の変容していく様子が線の画面に占める分量や、線の長さや描くスピードなどによって感じ取ることができる。

両者とも描き始めのころは慎重なストロークであるが、次第に活発になり、終わりのころには疲れたのかスピード感はあるものの、画面上の描線の分量が激減している。

また、図6はあやかちゃんが1月24日に描いた作品である。図5と比較してみると、図6の作品のほうがストロークものびのびとしている。担任にその日の様子を聞くと、やはり24日はいつもより会話が弾んでいたそう。長期の病欠の後、園生活のリズムを取り戻したところであり、保育者や身近な友達との関係も穏やかだったのであらう。そうした内的な心情がスクリブ

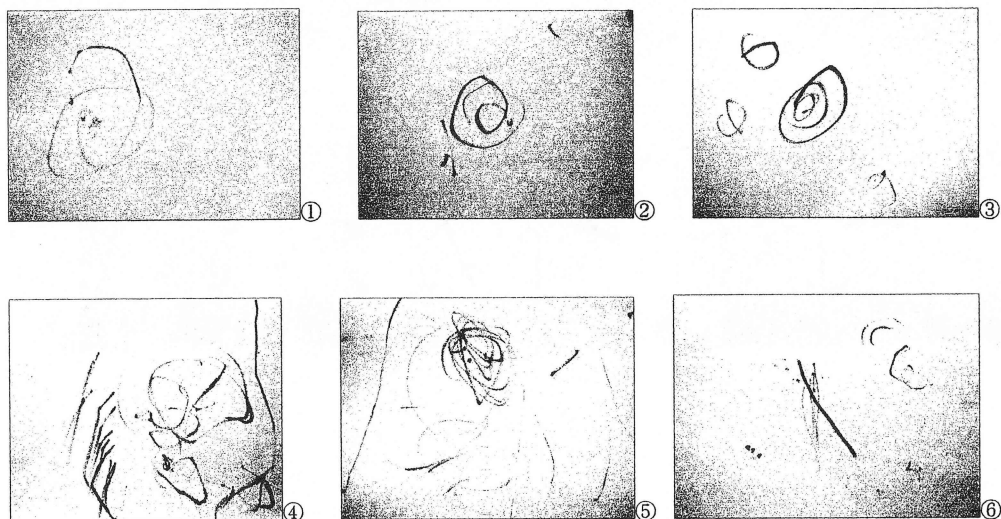
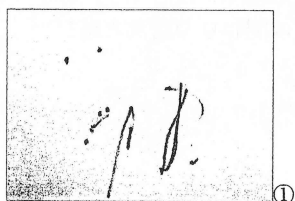
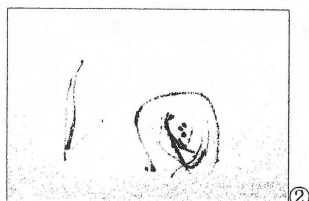


図4 のりひと 2歳4ヶ月 男児

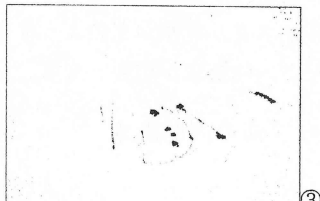
1995/1.19 連続して描いた作品



①



②

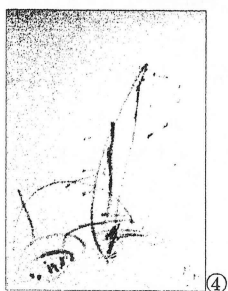


③

.....

あやちゃんのママ

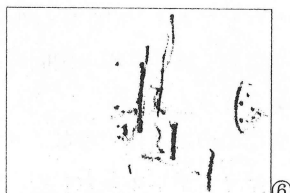
.....



④



⑤

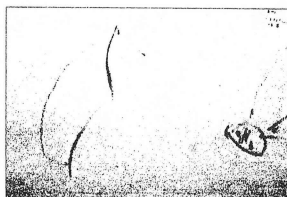


⑥

ワンワンとあやちゃん



⑦



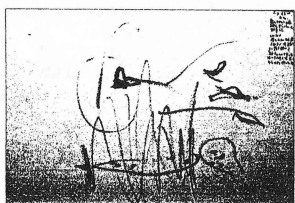
⑧



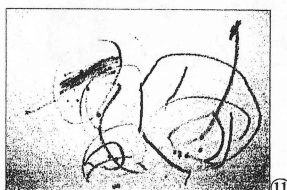
⑨

これ あやちゃん

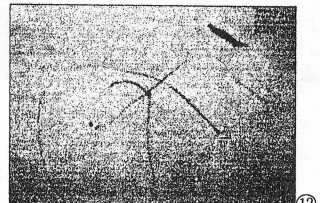
ママと言いながら円の中にテンを描いた



⑩



⑪



⑫

あやちゃんのママ

図5 あやか 2歳4ヶ月 女兒

1995/1.24 連続して描いた作品

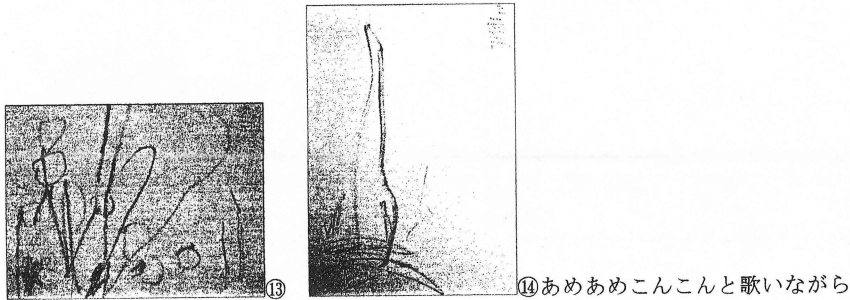


図6 あやか

ルの表われ方で感じ取れる。

以上は一人の子どもの、心の変容について考察したが、次に複数の子どもたちの描いたスクリブルを比較してみたい。

前出の作品も含め図7を参照してほしい。個々の心の状態は記録されていないが、画面全体に伸びやかにスクリブルしているもの、1箇所もしくは数カ所にこだわってスクリブルしているもの、描線の強さや長さなどがそれぞれに特徴がある。そうした違いに気づくことが子どもの心と関わる方法であろう。子どもを取巻く大人の多くが、スクリブルを子どもの表現として認識することが重要となる。

イメージについて

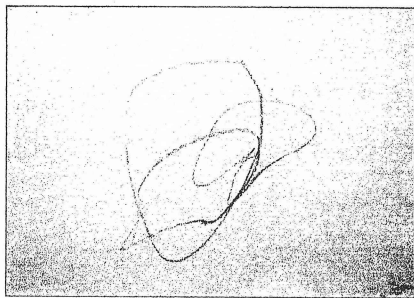
乳幼児の描画発達について触れる際に、本稿において論じてきた経緯から『錯画、なぐり描き』という呼称は使えない。そこで仮に、スクリブル期と呼ぶことにする。

描き始めのころと、自分で描いたスクリブルに自ら刺激されて描くころを区別しなければならない。さらに参照図として示してきた多くのスクリブルには「パパ」「ひこうき」…と言った意味付けされている作品も多く、これも発達の姿として認めていきたい。従ってスクリブル期をさらに3期に分類することになる。スクリブル獲得期・象徴的スクリブル期・意味付けスクリブル期と、呼ぶことは可能ではないだろうか。

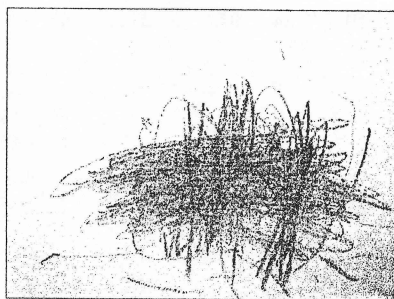
そのスクリブル期すべてにわたって、イメージと関わっている。

意味付けスクリブル期では、当然のことだが自ら描いた痕跡が視覚的刺激となって、言葉の獲得と深く関わりながら「〇〇〇」と伝えてくれる。たとえことばで伝えてくれなくても、図6の⑭のようにイメージして歌いながらスクリブルを楽しむこともある。

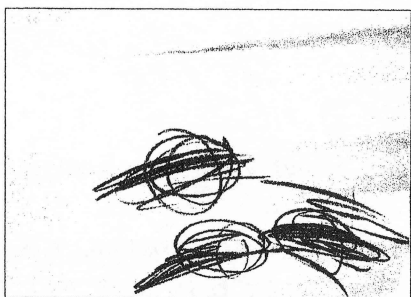
象徴的スクリブル期では、スクリブルすることが楽しくなるころである。手などを通して伝わってくる心地よさを感じていることはもちろんだが、むしろ自らがスクリブルした痕跡にこだわりながら、視覚を通した刺激の変化として意図的に取り組むので描線や点が集中的に描かれる。しかも画面の数カ所に描かれている事が少なくない。こうしたスクリブルを描いて言葉によって説明を加えるといったことがないため意味のない描線と思われがちだが、明らかにこ



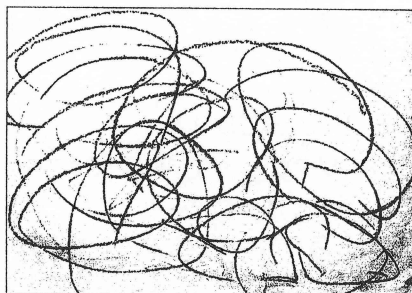
かおり 2歳6ヶ月 女児 「じいちゃん」



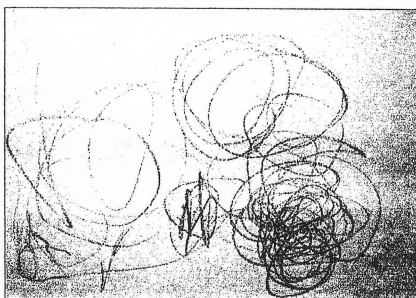
ちひろ 2歳9ヶ月 女児 「おとうさん」



てつお 2歳6ヶ月 男児 「ゴロゴロきたの」



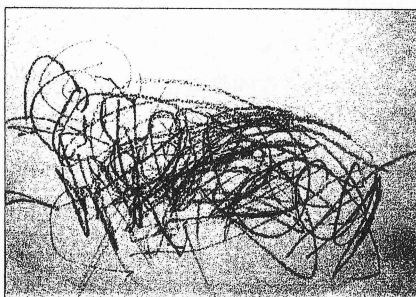
たくみ 2歳11ヶ月 「ジェットマン」



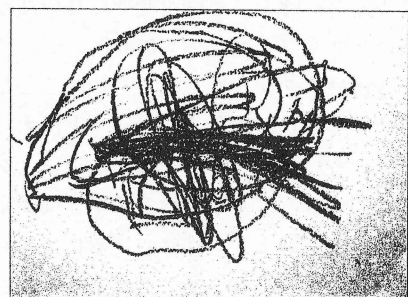
ともみ 2歳6ヶ月 「キリンさんとクマ」



なおと 2歳2ヶ月 「ひこうき」



ななこ 2歳9ヶ月 「自動車」



ゆうすけ 2歳8ヶ月 「パン」

図7 スクリブルの比較

だわった描線の重なりは子ども本人の意図を象徴しているように思われてならない。

本研究のきっかけとなった新聞紙へのスクリブルはまさに象徴的スクリブルといえよう。

スクリブル獲得期は最も緊張している時期といえる。手を動かしたら線が描けたといった偶然であったり、身近な人の刺激を受けて模倣しようとするころは、未体験のイメージと出会っていく。

いわゆる絵らしくなる以前のこうした時期は、自分の感覚器官を働かせて受け入れる（入力）、反応する・行動する（出力）、自らの行動が刺激となって反復する。そうした繰り返しが感性を磨くことになる。

さらにそうした繰り返される営みの間で、自分以外の人と関わる。ある時は刺激してくれる人であり、またある時は自らが刺激する人になっていたり、つまり受けたり発信したりという表現行動の原初的体験がスクリブル行動に含まれていることになる。

結 び

一見無意味に見えるスクリブルの中に、自らの感覚を駆使し行動し考えをめぐらすといった、人間として育つための重要な営みが潜んでいたことが明らかになった。これは先行研究の多くが描画行動の前段としてとらえていたり、無統制の行動としていることと大きく異なるところである。

改めて乳幼児期の育ちや生活環境について真摯に考え対応しなければならないと考える。

今日的な社会問題、いじめ虐待・母親の子育て放棄・人と関われない大人、などとも無関係とは言いがたい。

本題に沿いながら新たな研究課題も明らかになった。図3・ひろと君の作品にかかわり、頭足人表現とのつながりについても明らかにしていきたい。

これからも乳幼児の描画表現についての再検証を継続していきたい。

参考文献等

- (1) 「児童画の発達過程」ローダ・ケログ著 深田尚彦訳 p.11 黎明書房刊・昭和46年 Analyzing Children's Art が原書
 - (2) 「絵の教育」多田信作著 p.15 黎明書房刊・昭和46年
 - (3) 「児童画の心理と教育」霜田静志著 p.30 金子書房刊・昭和35年
 - (4) 「幼児の造形と創造性」W. Lambert Brittain (ランバート・ブリテン)・黒川建一監訳 p.37 黎明書房刊 昭和58年 [Creativity, Art, and the Young Child が原書]
 - (5) 「なぐり描きの発達過程」ヴォルフガング・グレッツィンゲル著 鬼丸吉弘訳 p.29, p.121 黎明書房刊 昭和55年
 - (6) 「幼児造形教育論」林健造著 p.47 建帛社刊 昭和62年
- 本稿と関連する発表・「乳幼児の Scribbling についての一考察」平田智久 日本保育学会 1995年